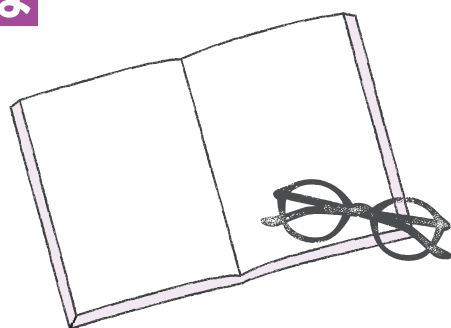


お手本を
なぞって

歎異抄

書いて学ぶ

親鸞のことば



「歎異抄」とは

『歎異抄』は、親鸞聖人の弟子・唯円ゆいえんの著作と考えられています。聖人が亡くなった後、誤った念仏ねんぶつの受けとめがなされることを歎なげき、唯円は聖人の言葉を書き記し、『歎異抄』と名づけました。亡き師から直接聞いた教えと異なってしまうている、当時の状況を深く歎いた唯円の思いがそのまま書名になっているのです。

また、『歎異抄』は、唯円がこの書を記すに至った由縁を示す「序」からはじまり、親鸞聖人の言葉を記した前半部「師訓篇しくんへん」(第一章～第十章)、さまざまな異義いぎ(誤った見解)を取りあげた後半部「歎異篇たんにへん」(第十一章～第十八章)、そして「後序ごじょ」で構成されています。本書では師訓篇を中心とした一部の文章を通して、親鸞聖人の言葉にふれていただきましたと思います。

本書における『歎異抄』本文は『真宗聖典 第二版』(東本願寺出版)に拠より、本文の選定、語句の意味、現代語訳、コラムは鶴見晃氏(同朋大学教授)が担当されています。

本書のつかいかた

本書は、『歎異抄』の言葉の意味を確認しながら、「書いて学ぶ」ことを目的にしています。まず、『歎異抄』の言葉を声に出して読んでみてください。次に、ペンまたは鉛筆で本文をなぞってみましょう。書き終えたら、再度、声に出して読み、語句の意味、現代語訳をふまえ、あらためて言葉を味わいましょう。

『歎異抄』にかぎらず、仏教の教えにふれるとき、言葉の難しさにとまどうことがあります。しかし、本文をくりかえし読み、声に出して親しんでいくことで、きっと親鸞聖人の伝えようとした内実にあつていくことができます。本書を通して、おひとりでも多くの方が『歎異抄』の言葉にふれることができますよう、お寺の同朋会どうほうかいなど、集いの場でもぜひご活用ください。

書いて学ぶ
親鸞のことば
歎異抄



目次

序	06
第一章	09
第二章	13
第三章	17
第四章	21
第五章	25
第六章	29
第七章	33
第八章	36
第九章	39
第十章	43
後序	47
書き終えた方へ	51

竊かに愚案を回らして、粗古今を勘うる
 に、先師の口伝の真信に異なることを歎
 き、後学相続の疑惑有ることを思うに、
 幸いに有縁の知識に依らずは、争でか易
 行の一門に入ることを得んや。全く自見

の覚悟を以て、他力の宗旨を乱ること莫
 かれ。仍って、故親鸞聖人御物語の趣、

語句の意味

竊かに

私見などを述べる場合の謙遜の言葉。

古今

親鸞聖人在世の昔(古)と亡くなられた後の現在(今)。

先師の口伝の真信

亡くなられた親鸞聖人より直接伝えられた、真実の信心。

後学相続の疑惑

これから教えを学び、受け継いでいこうとする者が疑いや惑いをいだくこと。

有縁の知識

縁のある導き手。

易行の一門

南無阿弥陀仏を称え、阿弥陀仏の力によって容易に浄土に生まれることができるという教えのこと。

自見の覚悟

自らの考え方で思い定めたこと。

他力の宗旨

阿弥陀仏の力によるという根本の教えのこと。

耳^{みみ}の底^{そこ}に留^{とど}まる所^{ところ}、聊^{いささ}か之^{これ}を註^{しる}す。偏^{ひとえ}に

同心^{どうしん}行者^{ぎやう}の不^ふ審^{しん}を散^{さん}ぜんが為^{ため}なりと云^う々^{ぬん}

現代語訳

私の愚^{おろ}かな考えをあれこれとめぐらして、あらあらと古^{いにし}と今^{いま}を考えてみると、お亡^なくなりになった師^し(親鸞^{しんらん}聖^{しょう}人^{にん})が直接^{じき}お伝え^{つた}くださった真^ま実^{じつ}の信^{しん}心^{しん}と異^いなる受^うけとめが見^みられることが歎^{なげ}かれ、後^{のち}に学^{まな}ぶ方^{かた}々^々が信^{しん}心^{しん}を受^うけ継^{つぎ}いでいくにあた^{あた}って、疑^ぎいや惑^{わく}いが生^はじてしまうのではないかと思^{おも}います。幸^{さい}いに教^けえを伝^{でん}えてくださる縁^{えん}ある方^{かた}にたよらなければ、どうして易^い行^{ぎやう}の一^{いち}門^{もん}に入^いることができよう

か。まったく、自分の見解にもとづいてわかったかのように思い、他^た力^{りき}の教^けえの大^{だい}事^じな意^い味^みを乱^{らん}してはなりません。そのため、故^ゆ親鸞^{しんらん}聖^{しょう}人^{にん}のお話^わしになられた大^{だい}事^じな事^{こと}柄^{がら}で、私の耳^{みみ}の底^{そこ}にのこっているところを、すこしですが、ここに書^かきとめます。これは、ただただ同^{どう}じく本^{ほん}願^{がん}の念^{ねん}仏^{ぶつ}を信^{しん}ずる行^{ぎやう}者^{しや}の皆^{みな}さん^{さん}の疑^ぎ問^{もん}をはらしたいためなのです。

聖^{しょう}人^{にん}の言^{ごん}葉^{えつ}を今^{いま}に届^{とど}けた歎^{なげ}異^いの心^{しん}

著^{しよ}者^{しや}である唯^{ゆい}円^{えん}は、親鸞^{しんらん}聖^{しょう}人^{にん}が亡^なくなったとき、40代^{だい}でした。聖^{しょう}人^{にん}が京^{きやう}都^とにいた晩^{ばん}年^{ねん}、親^{おや}しく言^{ごん}葉^{えつ}を交^{かう}わした方^{かた}と思^{おも}われます。第^{だい}九^く章^{しやう}や第^{だい}十^{じゅう}三^{さん}章^{しやう}にはその対^{たい}話^わの姿^{すがた}が生^いき生^いきと書^かき記^きされてい^います。こ^{この}のよ^{よう}な対^{たい}話^わを通^{とお}して、親鸞^{しんらん}聖^{しょう}人^{にん}の言^{ごん}葉^{えつ}が唯^{ゆい}円^{えん}の心^{しん}に深^{ふか}く刻^きまれたのでし^しょう。しか^{しか}し、聖^{しょう}人^{にん}が亡^なくなった後^{のち}、聖^{しょう}人^{にん}の信^{しん}心^{しん}のす^すがた^{がた}と異^いなる受^うけとめがな^なされてい^いる。老^{らう}境^{きやう}にさ^さしか^{しか}か^かつた自^じ分^{ぶん}が今^{いま}、聖^{しょう}人^{にん}の言^{ごん}葉^{えつ}を遺^いさな^なければ、後^{のち}の人^{ひと}々^々が「易^い行^{ぎやう}の一^{いち}門^{もん}」に入^いることができ^きないと思^{おも}ったに違^{ちが}いありま^ません。唯^{ゆい}円^{えん}に動^{どう}いた、異^いなるを歎^{なげ}く心^{しん}は、現^{げん}代^{だい}の私^{わたし}たちにも親鸞^{しんらん}聖^{しょう}人^{にん}の言^{ごん}葉^{えつ}を届^{とど}けてくれ^{くれ}てい^います。

唯^{ゆい}円^{えん}の書^かきぶ^ぶりには、鋭^{えい}いながらも同^{どう}じ信^{しん}を生^はきる行^{ぎやう}者^{しや}を想^{おも}う心^{しん}が溢^{あふ}れているように思^{おも}います。異^いなる者^{もの}を非^ひ難^{なん}するのではなく、異^いなる受^うけとめを悲^{かな}しみつ^つつ、「幸^{さい}いに有^う縁^{えん}の知^ち識^{しき}に依^よ」ること、すなわ^なち、親鸞^{しんらん}聖^{しょう}人^{にん}の言^{ごん}葉^{えつ}にであ^あうこ^こを願^{ねん}っているのです。そ^それが唯^{ゆい}円^{えん}の歎^{なげ}異^いの心^{しん}です。親鸞^{しんらん}聖^{しょう}人^{にん}の言^{ごん}葉^{えつ}に今^{いま}、私^{わたし}たち^{たち}がであ^あうこ^ことは、時^{とき}を超^こえて「先^{せん}師^し口^く伝^{でん}の真^{しん}信^{しん}」にであ^あうこ^こにほ^ほかなりま^ません。親鸞^{しんらん}聖^{しょう}人^{にん}の言^{ごん}葉^{えつ}にふ^ふれるこ^こを通^{とお}して、私^{わたし}たち^{たち}の信^{しん}心^{しん}を確^{かく}め^める。そ^そこに『歎^{なげ}異^い抄^{しやう}』に学^{まな}ぶ意^い味^みがあ^あります。

書いて学んで、ひと言

月 日